

研究論文

公益考（三） ——公益に関する題材の検討——

三原 容子

はじめに

前稿「公益考（二）—庄内地域の取扱いについて—」（以下第 12 号論文と略す）は、「公益」がタイトルに入っているが、「公益」を直接扱ったわけではない。「公益」に触れる前段階として、山形県庄内地域が他地域に見られない特殊性（近世から戦後に至る支配者層の連続性）があることを指摘し、特殊性から生ずる取扱いの留意点について、特殊性を反映した文献の様相について、加えて、地域史研究を今後に活かす方法について、提示したものである。庄内の地域史研究では従来、全体の大まかな見取り図（マップ）が描かれていなかったの、地域史研究の膨大な蓄積を活用するのに役立つものと考えている。

ところがはからずも、小松隆二氏から「庄内地域と公益に関するメモ—三原容子さんの批判にこたえる—」と題する反論をいただいた。これによって公開の場での議論が始まったことを大いに感謝するものである。

小松氏は第 12 号論文について、「すでに発表した私の公益に関する著作にみられる視点や方法に対して本誌第 12 号に批判を寄せられた」（小松 2007b : 87 頁、以下、引用文献は末尾リストを参照されたい）と受けとめ、庄内が「公益のふるさと」であることを否定しているのは間違いだと主張された（小松 2007b : 94-95 頁）。すでに述べたように、第 12 号論文は、「公益のふるさと」であるかどうかを検討したものではない。小松氏の「公益のふるさと」論への疑問については、「はじめに」のところでほんの少しだけ触れたにすぎなかった。主旨に対しては一言の言及もないので、認められたということだろうか。

反論をいただいたのを機に、今回は第 12 号論文では扱わなかった「公益」に関わる検討を行いたい¹。筆者が「特別に庄内において『公益』の傾向が強かったと語るには、『公益』や同義語として用いられる『世のため人のため』

とは何かを規定した上で、他地域との違いを実証する必要があるだろう」（三原 2007：：84 頁）と書いたことに対して、小松氏は「ある程度説得的な要件が揃えば、〔公益の一引用者〕『故郷』や『里』を名のっても殊更問題はないと、私は考えている。」（小松 2007b：94 頁）と答え、「砂防林のクロマツ林」、「公益の用語を取り入れた家憲や多くの公益の碑」、「庄内藩の農業倉庫」などを見るだけでも、「庄内地域を『公益の故郷』と呼ぶことにとくに問題はない」（小松 2007b：95 頁）とされている。果たして、これらの題材は「公益」に関する「説得的な要件」を備えているのだろうか。

まず第一章では山居倉庫について、第二章ではその他の題材について、「説得的な要件」があるかどうかを検討する。第三章では、これらの題材を使って「公益」を語ることの是非について考えてみたい。

なお、第 12 号論文と同様、今回もまた膨大な先行研究の成果をなるべく活用することに努めたが、まだまだ未見の重要文献があるだろう。新たな出会いによって筆者の主張に間違いが判明した時には、即座に訂正していくつもりである。なお、読者の便宜を考えて、引用の際に難読漢字にはよみがなを、濁っ読むべき片仮名には濁点を付した。

第一章 山居倉庫

山居倉庫について小松氏は、「庄内の農業倉庫・山居倉庫は公益と無縁か」の独立した項目を設けて論じられた。果たして山居倉庫を公益のシンボルとしてよいのだろうか。

（1）産業組合との対立

「公益の故郷」と称してもよいとされる理由の部分を引用しておこう。

庄内藩の農業倉庫は、戦前から農学者たちによって日本では最初の公益性の高い倉庫と評価されてきた点がある。山形県庄内総合支庁の関係者の皆さんと庄内地域を「公益の故郷」と呼んでよいかどうかの議論をしたとき、私がそう呼んでよいと説明した際に、上記の諸点〔クロマツ林と家憲や石碑一引用者〕の他に、そのように庄内藩の農業倉庫が戦前から研究者によって公益性の高さを評価されてきたことを、戦前の文献を手にと

ってもらって説明したことを思い出す。(小松 2007b : 95 頁)

私は、戦前の農業関係の学者たちが、山居倉庫をはじめとする庄内における農業倉庫の前史にあたる庄内藩の農業倉庫を、日本における最初の公益倉庫と戦前から評価していたことを先に紹介した。そう評価しているのは、私が拙著『公益の時代』論創社、2002 年、他)で紹介した河田嗣郎を含む複数の学者たちである。彼らの公益の認識には、現在からみると、多少の違和感を感じるものの、私は、彼らが公益倉庫と規定する視点を否定する資料を持ち合わせていないので、江戸時代の庄内藩の農業倉庫は公益性が高いという位置づけと評価を得ていることをそのまま受けとめ、利用させていただいた。(小松 2007b : 96 頁)

小松氏においては、山居倉庫が「公益」たる最大の理由が河田嗣郎(1883－1942)の評価であるらしい。他の学者の名は見えない。「現在に引き継がれ、歴史的・建築的景観としても活かされている状況、そして住民、地域、環境等への影響も視野に入れてよい」(小松 2007b : 96 頁)とも述べられているが、付随的な書き方である。

河田嗣郎はなぜ庄内藩の倉庫を公益性が高いと評価しているのだろうか。参考文献として挙げられた『農業倉庫』(1918 年)を確認しておく必要があるだろう。

筆者は、河田が米券倉庫一般について、「大体に於ては営利と云ふよりも寧ろ多く公益上の任務を有するものとせられ、少くとも其の性質及び職能の一半に於て公益的性質と公益的任務とを有するものとせられる」と同時に、又一面にはそれは決して専ら商人の為めに存するものではなくて、農民の為めに存するもの、少くとも農民の為めに存す可きもの」(河田:11-12 頁、傍点は原文のまま)と「公益」の語を用いていることを確認した。また、庄内の倉庫が米券倉庫の中で最も古いと書かれていることも確認することができた。しかし、庄内の倉庫に対する積極的評価は確認できなかった。それどころか、河田が山居倉庫を批判的に取りあげていることを確信せざるを得なかった。

河田の著書が発行された前年の 1917 (大正 6) 年に農業倉庫法が公布・施行された。その第 4 条は、農業倉庫の経営主体を「産業組合、農会、農業ノ発達ヲ目的トスル公益法人 並 市町村 及 之ニ準ズベキモノニ非ザレバ農業倉庫業者タルコトヲ得ズ」と限定し、営利会社を排除している。産業組合は農業協

同組合（農協）の前身にあたる戦前の協同組合であり、農会は戦前の農事改良団体である。実施の際の農商務大臣内訓にも「従来地主匿名組合等ニシテ農業倉庫ヲ経営スルモノハ此際成可ク其ノ組織ヲ産業組合又ハ公益法人ニ改ムル様指導スベシ」とある²。農業倉庫のような公益性を有する施設は、会社経営ではだめだということになったのである。こうした農業倉庫法の趣旨を、河田は強く支持していた。

最古の倉庫であること以外に、もう一ヶ所庄内に言及している箇所で、「山形県では、酒田鶴岡の二米券倉庫は既述の如く〔最古の米券倉庫が明治以降私人の経営に移り、現在酒田米穀取引所の事業であること（河田：21-22 頁）—引用者〕何れも株式会社なる米穀取引所に属して居」（河田：316 頁）と指摘している。それに続いて多くの紙数を費やし、会社による経営の非なること、経営の最適任者は産業組合であることを説く。

米券倉庫なるものは決して純然たる営利団体ではなくして、頗る公益的性格を有するものであるが故に、之をば専ら営利を為すを目的とする団体として、商法の下に規定せられたる株式会社組織や合資会社組織やにすることは、決して当を得たるものと云ふことが出来ぬ。営利団体に適用す可く設けられてある法の規定の下に於て、公益的性質を帯びた事業を円滑有効に行つて行かうと云ふのは、実に無理なことである。（河田：317-318 頁）

然らば何れが最も適当なる農業倉庫業者と見らる可きかと問へば、吾人はそは即ち産業組合なりと答ふるに躊躇しないのである。（河田：326 頁、傍点は原文のまま）

市町村や農会が自ら之を行ふよりも、之が利用者をして自動的に之を経営せしむるを可とするものである。…〔中略〕…利用者たる人々をして自助的に農業倉庫業の経営を為さしむるに当りては、彼の産業組合なるものは、正に恰も好く之を為すに適する組織なりと謂はなければならぬ。（河田：330 頁）

農業倉庫法公布の後、庄内では長く産業組合による農業倉庫設立運動と倉庫会社（山居倉庫）との対立が続いた。河田の『農業倉庫論』は農業倉庫設立運動以前に書かれたが、山居倉庫のような会社経営の倉庫に対して批判的な書であったと言えよう。

産業組合と山居倉庫の対立の経緯については、倉庫や農協関係の文献で必ず触れられていることであって、すでにほぼ確定済みである。参考文献を5点挙

げておこう（発行順）。

①小山孫二郎「大地主と庄内米の流通——山居倉庫の顛末——」（1958年）

②『山形県農業協同組合沿革史』（1960年）

③庄内経済連『庄内経済連 25 年のあゆみ』（1974年）

④高橋義順『山居倉庫と庄内米』（1997年）

⑤菅野正「山形県庄内地方の農民と農本主義」（2002年）

①と④は主に戦前の山居倉庫について述べている。小山は産業組合（農民側）、高橋は山居倉庫側と、語り手の立場による材料の選択や表現の違いは若干あるが、大筋の記述は似ており、戦前における対立と和解の経緯がたどられている。⑤は①④と同じ時代を扱い、農民の闘いに絞ってコンパクトにまとめている。②③は、戦後もなお酒井家が所有していた山居倉庫（並びに山居系倉庫）を農民たちが買い取った経緯が詳しい。以下、ごく簡単に経緯をたどっておこう。

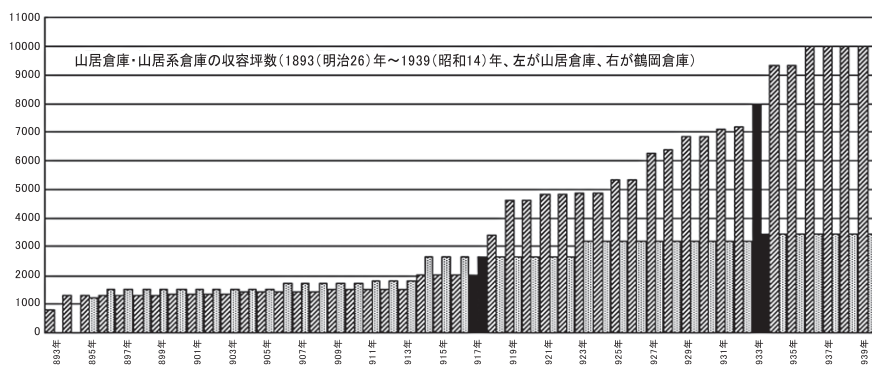
1893年、旧庄内藩主酒井家の金と人、本間家の協力によって酒田米穀取引所と附属山居倉庫は創立された。株式会社と言っても実質的には酒井家の個人的経営である。利益は名目上の株主たちに配当せずに、すべて会社の発展のために使用された。厳格な米検査と管理の仕組みの確立に努めた結果、1911年に県の検査制度が実施された時には県検査免除となったばかりでなく、検査講習が山居倉庫の指導で行われたほどであった。設立以来、庄内の倉庫入庫米の約70～90%を集めるという独占的な支配が続いていた。

米価調節対策の一環としての1917年農業倉庫法が公布されると、農業倉庫には県と国の助成措置により、建築修繕買収に4～6割の補助金が交付されるようになり、山居倉庫の独占状況に危機が訪れた。この頃より山居倉庫は猛烈な勢いで拡充新設を行い、「庄内の倉庫は足りており農業倉庫は不要である」という既成事実を作っていた。法律の制限枠に対処するために、一心同体の「山居賃貸倉庫株式会社」を設立するという方策もとった。それに加えて、庄内のために旧藩主を中心に運営され実績を挙げてきた特別な倉庫であるという「庄内地方の特殊事情」という考え方が、農商務省の上層部（荷見安ら）の承認を得、信頼関係を築くことによって、農業倉庫の進出を抑えることができた。

庄内の産業組合の農業倉庫設立の努力は、何度か失敗に終わったが³、1933年、産業組合青年連盟全国連合会（産青連）が結成され、山木武夫、渋谷勇夫

を中心に、庄内産青連の活発な活動が始まると、農民自身の倉庫を建設しようという機運が高まり、山居倉庫の妨害の中、1933年3倉庫を皮切りに、次々と農業倉庫を建設していった。

産業組合は中央政府で設立計画や普及を始めたことに見られるように、もともとはかなり体制的な組織活動であったが、庄内では、危険な運動、反体制的な運動と見なされる状況があった。自分たちの倉庫を持ちたいという農民の動きが過激であるかに見られたのは、それだけ山居倉庫側の妨害活動が烈しかったことを物語るものと言えよう。全国的に見て特異な事例である。



上のグラフは、山居倉庫（経営体と同じ倉庫を含む）の収容坪数の変化を表したものである（山居倉庫に対抗して「平民」によって作られた鶴岡倉庫の収容坪数も合わせて示した⁴）。黒く塗りつぶしたのは、農業倉庫法公布の1917年と、産青連の活動によって農業倉庫が建設された1933年である。この間における山居倉庫の急増設ぶりがよくわかる。

米穀統制政策はその後も進行し、1939年に米穀配給統制法が公布され、日本米穀会社が発足すると、商業資本である山居倉庫の存続が許されない事態となった。その年9月、県の仲介で山居倉庫と産業組合（県購販連）は協定を結ぶことになった。山居倉庫の倉庫等は財団法人北斗会に寄附され、産業組合は北斗会から「無償」という名で交付金を支払い借りること、山居賃貸倉庫会社の所有倉庫等は有償で借りること、産業組合の役員には山居倉庫からも入り合

議制とすること、などが決まった。北斗会の名称は、星々が北極星を中心に回るように、「酒井家ヲ中心ニ庄内ヨリ全国ヲ指導シテ」（高橋：206 頁）農業を振興する意味で付けられている。北斗会や賃貸会社に入る収入は、東北農家研究所（安岡正篤の弟子にあたる菅原兵治を中心とする農道学の研修所）、倉庫株主への配当、酒井家邸内の学習会（以文会）などへ配分された。

戦後に県購販連を引き継いだ庄内経済連は直ちに北斗会と山居賃貸会社に対して所有権譲渡の話合いを始めた。生産米を農民に有利となるように販売するためには自前の倉庫がほしい、賃貸料や補修費等がかなりの額にのぼる、などの事情があったためである。買収が実現したのは 1957 年であった。山居倉庫はようやく庄内経済連（農協）の所有となり、その半世紀後の 2008 年 4 月「一県一農協」への統合により全農山形の所有となった。

河田は農業倉庫に「公益的性格」があると考えたのだが、庄内地域では山居倉庫の存在によって、河田が推奨する産業組合経営の実現が、40 年も遅れたことになる。小山孫二郎が何度も強調したように、戦前の山居倉庫によって最も利益を得た者は地主だったろう。それでも、山居倉庫が庄内米ブランド向上に貢献した功績は否定できない。功績を最大限認めたとしてもなお、河田の著書を山居倉庫の公益性の理由に挙げるならば、それは誤読に基づくものであると言わざるを得ない。山居倉庫は河田の意向とは逆に動いたのだから。

（2）排除と不正

山居倉庫の職員が旧士族かその子弟に限られていたことについては、小山だけでなく、山居倉庫を擁護する高橋もまた記述しているところである。以下、山居倉庫の精神を擁護する立場にある高橋の著書から引用して確認しておこう。

倉庫職員の多くは菅実秀の薫陶を受けた人を充てた。（高橋：64 頁）

職員は旧士族あるいはその子弟で、通勤は物理的にできない……（高橋：109 頁）

〔山居創業の大精神を〕よく守り、よく勤むる者は、一生生活を保障されるが、此の精神にそむく者は追放だ。一度禁をやぶって追放されると一生日陰者となって、旧藩士同志の付き合いも出来ぬという厳格な制裁が断行されるのだから庫員の行状は自ら粛正されなければならない（高橋：122 頁）（「平民」が設立した鶴岡倉庫との米価格差は当然

だと論ずる山口成吉「日本一の山居倉庫とその伝統精神」より重引)

山居倉庫に批判的な小山は、農民に対する「旧士族団の封建的支配者意識」と、薄給でも誠実に職務に励む「旧藩主の主家に対する旧士族の自己犠牲」の両者が山居倉庫の権威をうちたてたと指摘している(小山:741頁)。

旧藩士族の結束による経営を美談と見るのか、封建制度の悪しき名残で排他的行為であると見るのかは、人によって様々だろう。筆者は、旧被差別身分の人々が差別的な状況を改めるために血のにじむような運動を続けてきた歴史を研究してきたためか、美談と見る感覚を持ち合わせないが、ここでは筆者以外の人々の感覚も参考にして論じたい。

公益法人制度の大幅な改革によって「公益認定」が必要とされるようになる中で、公益法人協会は、10名余りの市民による1年半の議論によって『『真の市民による』公益性判断の『物差し』づくり』(財団:iiv頁)を試みた。その成果が報告書にまとめられている。「公益性」認定について多くの人が納得するような基準を設けるという意図のもとに行われた試みであり、より多くの人が納得できる内容となっているように思われる。その結論部分から、山居倉庫の判断に関わると考えられる部分を紹介したい。

「公益と私益とを分かち本質は、『利他』=『自己の排除の要請』ではなく、『利己でないこと』=『他者の排除の禁止』と考えられる」(財団:86頁)。つまり、「ニーズがある人をその享受から排除すればそれは私益である」(財団:85頁)。また、制限を設ける場合であっても、たとえば一定の収入以上の者を排除する場合には公益性が認められるが、一定の収入以下の者を排除する場合は公益性が否定される(財団:70-74頁)ように、「特権的な閉じたグループ」の利益は公益とは見なされない(財団:135-136頁)

以上のような方向からすれば、職員採用に際して旧藩士族が平民を排除するという身分的な制限は、よほどの説得力ある理由がない限り、「排他性」ではあっても「公益性」とは言えないということになるだろう。

また、「公正」という点でも、山居倉庫には問題があると疑われている。「公正」は「公益」か否かを論ずる以前の倫理的段階である。まず、「刺し」(米の検査の際に俵に差し入れて少量の米を抜き出す道具)について紹介しよう⁵。

苦情の一つに、入庫検査の際に特に太い刺しを使用し、抜きとった米を俵に戻さず

に捨ててしまうということがあつた。大正九年（一九二〇）頃、農民はこのことを問題にしたが、そのためかどうか詳らかでないが、山居側は刺し米をこぼすことを大正九年以来禁止した。ある有力な山居倉庫の元関係者は、年間のこぼし米は三千俵に上つたと計算している。なお、こぼし米は倉庫の収入として職員に配給された。（小山：754 頁）さらに、百姓で詩人の真壁仁は米穀検査員になって知った収益の挙げ方について書いている。米が温度湿度によって膨張し収縮する性質に関わる問題である。

山居倉庫は、小作米の納期を一ヶ月延ばして厳冬の一月に米を運ばせた。もっともしまった米を四斗量って倉に収めさせ、端境期（新米の出る前、九月）に俵を切って量りなおし、ちょうど膨張しているのを四斗にして京浜や大阪へ出荷する。そういうときは清算市場での米の値がいちばんよいときであった。小作米を一〇〇〇俵改装すると、脹れた米は三〇俵ぐらいふえた。米の生態を知っている商人や地主は、それだけで大きい利益をあげていたのだ。これに対して、小作人たちは、納期をのばしてくれたことを地主の温情と受け取っていた。知らないということは恐ろしいことだと私は思った。（真壁：128-129 頁）

商売人が利益を上げるためにあの手この手を用いることには驚かない。問題は、そうした営利的な行為も行っていた倉庫を「公益」のシンボルとして使用してよいか、である。

第二章 山居倉庫以外の題材について

歴史的に不確かなことが史実であると誤解されることによって、人々の行為に好ましい効果がもたらされ、嘘が人を育てるということもあるかもしれない。しかし、歴史研究者が不確かなことを確かであるかのように語ることは、問題があると言わねばならない。本章では、山居倉庫以外に3点だけ、不確かな題材を採りあげる。

（1）本間家の家憲

小松氏は「庄内では、公益の用語を取り入れた家憲や多くの公益の碑が古くからみられたことも、顕著な特色である。家憲に公益を取り入れた点では本間

家のそれは、これまで知られる限り、歴史的に最も古いものである。」(小松 2007b : 95 頁)と書いておられる。本間家の「公益」の家憲とはいかなるものだろうか。「五十公野清一^{いずみの}の作品・著作は、『公益』の家憲も紹介するなど」(小松 2007b : 98 頁)とあるところを見ると、五十公野の作品に記された「家憲」を指すと推測される。

五十公野清一の二つの作品『大地主』(1942 年)と『本間光丘』(1943 年)には、12 項目の「家憲」が登場する。ほぼ同じ文言で、「三つ、公共事業に全力^{つく}を竭し、公益のためには財を吝^{おし}む勿^{なか}れ。」(五十公野 1942:47 頁、五十公野 1943: 201 頁)とあり、光丘が晩年に書き記した話になっている。

五十公野の記したこの「家憲」であるが、本間光丘を顕彰する、齋藤美澄『贈正五位本間四郎三郎光丘翁事歴』、安倍季雄『本間光丘翁』、堀川豊永『救荒の父本間光丘翁』の 3 冊には見当たらない。敢えて該当する文言を探すならば、光丘の祖父の遺訓である「太平の世に生れ産業を治め父母妻子を仰事俯蓄するを得るは、皆国君の恩沢^{いやしく}なり、苟も資産に余贏^{よえい}を存せば、必ず応分の義^{いた}を效し、其万一を報ぜざるべからず」(齋藤 : 2-3 頁、安倍 : 7 頁、堀川 : 20 頁)だろうか。あるいは光丘が 25 歳の時に記した、親類に金を貸す際に投機事業を禁じた自筆の「家道教訓書」のことだろうか(齋藤:8 頁、安倍:14-15 頁、堀川: 24-26 頁)。

佐藤三郎『酒田の本間家』は、光丘の家事 9 ヶ条、家道訓 7 ヶ条以外に、「光丘が作ったと伝えられる」家憲があることを指摘している。10 項目の 3 番が「国家一地方郷里の為には全力をつくすこと」で、五十公野の「公益」項目と似ている。これについて佐藤三郎は、「光丘が定めたものか、後世書き改めたものか、工藤定雄氏は「まぼろしの家憲」といっている」(佐藤:231 頁)と書いている。以上のような確認不可能な話とは別に、本間家自身は、本間家の家訓は水戸斉昭の筆による「満而不溢所以長守富也」(満ちて溢れざるは長く富を守るゆえんなり)であると語っている⁶。

「公益」の家憲は、五十公野が時代の世相に合わせて創作したものであり、ネタの源となった綱領や家訓、遺訓も今一度、真贋や時代の考証を必要とするものであろうというのが筆者の現在の見解である。

(2) クロマツの植林

庄内の海岸に伸びる砂防林が農業生産や住民の生活に不可欠であることを否定する者はいないだろう。植栽関係者たちが技術的にも精神的にも体力的にも苦労を重ねたであろうことも、推察されることである。筆者が問題としたいのは、砂防林植栽を美談化し、不確かな話が真面目な史実として受け取られるようになることの危険性である。本間光丘が私利私欲なしに酒田市街地周囲の松林を造成したという物語はまだ真偽不明である。

「本間光丘ゆかりのクロマツ」の扱いについては、第12号論文において、立石友男「藩制時代における庄内砂丘の砂防植栽（Ⅲ）—酒田本間家の事例的研究—」と石川正敏『庄内風土記 上巻』の記述を既に紹介したので、ここでは、美談に関連する疑問点を2点整理しておくにとどめる。あまりの富者であるがために根拠なきデマを流された可能性も残されているが、じっくり研究すれば明らかになるはずの事柄である。

一つ目。1919年に「光ヶ丘」と改称された地域を含む広い範囲の植栽に、本間光丘は関わっただろうか。おそらく関わったのは、ごく狭い範囲であろう。

二つ目。酒田の人々のために私財をなげうって工夫と苦労を重ねたという利他的な行為だったのだろうか。植栽は未開墾の広大な谷地を入手するために編み出された巧妙な方策であったという指摘は、十分に検討する価値があるだろう。

(3) 碑文等の「公益」

小松氏は「公益」の文字を刻んだ石碑の存在を「公益の故郷庄内」の理由の一つとして挙げておられる。光栄なことに、大学近くの水田の中に立つ「公益」の石碑を筆者が見付けた話が著書や講演で何度か紹介されてきた（小松a：24頁、小松b：160頁）。

その石碑（酒田市飯森山の「中瀬渡船碑」（1909年））については、すでに発表したことがあるが⁷、「説得的な要件」の関連で再度取り上げよう。

碑文は、佐藤七郎兵衛正廣が広大な水田の開墾を成し遂げ、その代償に申し出られた地権取得を断り、最上川を渡す渡船の設置を願ったと語っている。石碑にほど近い飯森山の稲荷神社境内には、「佐藤七郎兵衛正廣碑」（1881年建立）

があり、また、飯森山部落の母体が坂野辺新田部落であることを記した「本末の碑」（1888 年建立）も立っている。

稲荷神社境内に二つの碑がある事情について、長井政太郎は、飯森山部落の建設は佐藤太郎右衛門の骨折りによるものであるのに、「佐藤七郎兵衛正廣碑」が太郎右衛門の功にまったく触れないことを取り上げ、「恐らく何等かの感情問題が正しい史実を誤り伝えているのであらう。少くとも文献の上には少しも現れて来ない人物を開墾祖とし、各方面の接渉の衝に当つて骨折つた人物を無視している事は誤りである」（長井：95 頁）と、佐藤七郎兵衛の顕彰に疑義を表明している。「公益」の碑は一種のケチがついた形になっている。

これはたまたま筆者が知っている事例である。他の碑文の多くについても、一つ一つの石碑について精査していけば、さまざまな込み入った事情があるのではないだろうか。「公益」の文字は教育勅語発表以来全国的に一般的に使用された語であり、その文字が碑文にあるからと言って、顕彰対象が、誰もが納得できる善行や人物であるとは限らない。

第三章 「公益」の宣伝と研究

「公益」を語る際に歴史的な材料が用いられてきたのは、公益学という学問上の必要よりも、説明のわかりやすさ、印象深さなど、宣伝が優先されたからではないだろうか。この章では、宣伝と研究の区別に関して論じていきたい。

（1）歴史的題材の教材化の問題

歴史的な題材を用いる場合、歴史研究者には正確な事実把握を行う責任があると考えられる。出来る限り先行研究の確認や資料の批判的取扱いに努めなければならない。そのように述べるのは、不正確な話を歴史的な事実であったかのように使う授業が、すでに行われているらしいことを知ったからに他ならない。「公益」を採りあげた二つの授業例を取り上げよう。まずは宗教学を専門とする教員による大学の講義である（東北公益大：60-61 頁）。公刊された報告書に掲載された五回分のうち一回分を省略せずに掲げる。本間光丘を賞讃する宣伝パンフレットを教材に用いて考えさせている（下線は原文のまま）。

講義目的：本間光丘がなぜ「公益の人」なのかを探る。

講義内容：以下の諸点を考察する。

①「本間さまにはおよびもないが、せめてなりたや殿さまに」とうたわれているが、この戯れ歌の意味を考えてみると、何かおかしいなと気づくだろう。なぜか？ この戯れ歌は何を言おうとしているのだろうか？ →考えてみよう、その意味を!!

②光丘の植林事業はクロマツ林にその面影を刻んでいるが、なぜクロマツだったのか？
その植林の起点はどこだったのか？ →訪ねてみよう、その起点を!!

③光丘はなぜ公益の人といわれるのか？ その思想と事蹟は何だったのか？ →まとめ
てみよう、その要点を!!

④公益のセンスは今日の酒田に、庄内に、どのように継承されているのだろうか？ →
調べてみよう、この地域の公益活動を!!

参考資料：

- 1、酒田青年会議所編『酒田に本間光丘あり—漫画で読む公益の祖・本間光丘—』
- 2、酒田市役所製作『酒田ものしり満タン CD-ROM』
- 3、佐藤三郎『酒田の本間家』（中央書院）
- 4、酒田商工会議所創立百周年記念誌『自由都市、酒田から』

配付資料：

- 1、「みんなで考えよう、庄内砂丘のクロマツ林」（庄内総合支庁）
- 2、「スプーン 11、（特集）本間光丘のメモリアル」（SPOON）
- 3、「光丘文庫探訪、本間光丘メモリアル 200 記念特別編集」（光丘文庫）

次は小学校 6 年生の道徳の授業である⁸。長文なので一部を紹介する。先に紹介した「まぼろしの家憲」を使用して「本間家代々」を好意的に扱っている。

公益の祖「本間光丘」

写真提示（東北公益文科大学）

説明 1 東北公益文科大学です。21 世紀の幕開けとともに 2001 年 4 月、酒田市に開学しました。2005 年 4 月には、鶴岡市に大学院が設置されました。「公益学部」の誕生は、日本で初めてです。

〔中略〕

説明 7 「本間光丘」は、今から 200 年以上も前の人ですが、若いころから「公益」の考え方、生き方をしていた人なのです。それで、「公益の祖」といわれています。

〔中略〕

説明 1 1 実は、本間家には初代から今に受け継がれている「家訓」があります。

その一部を一緒に読んでみましょう。

家訓提示 1 慈善を旨とし、陰徳を重んずること 1 国家、地方、郷里のためには全力を尽くすこと 1 質素を守り、勤儉の美德を発揮すること

説明 1 2 この家訓からも、本間家は代々「公益の心」を大切にしてきたことがわかります。東北公益文科大学のある庄内に住む者として、私達も本間光丘のように、「公益の心」を大切にしたい生き方や暮らし方をしていきたいものです。今度の総合的な学習では、自分にできる「公益的な生活」について考えたり実践したりしていきましょう。

いずれも歴史を専門としない教員が、歴史的に確定した事実であると信じて教材にとりあげたと推測される。

筆者は、神話に登場する人物の事蹟を学ばせた戦前の授業を連想してしまっただ。たとえば、小学生用の歴史の受験参考書に次のような問題が出ている。「天照大神の御徳の高いと思はれる点は何々でありますか」。模範解答は「はじめて稲や麦などを田畑にうゑさせたり蚕をかはせたりして万民をおめぐみになつた」である（楞野：1頁）。戦後 60 年余を経た今日、天照大神が神話上のヒロインであることを知らない者はいない。しかし、戦前の教室では神話が歴史として教えられていた。

本間光丘に関わる不確かな話をあたかも歴史的に確かな出来事であるのかのごとく教えるという点で、以上の 2 つの授業案は戦前の歴史教育に似ている。批判力のある学生や児童はとまどうだろう。そうでない学生や児童は教員の言葉を信じるだろう。

歴史を専門とする者を信頼するからこそ、専門外の者はその発言内容を真に受ける。発言者は宣伝のための便法であることを承知していても、周囲が真剣に受けとめて一人歩きが始まることがある。肩書きのついた専門家の言は重たい。

（2）宣伝と学問の区別

『公益の種を蒔いた人びと』（2007 年）の滝口克典氏の新聞の書評に対して、小松氏は紙上に反論を掲げられた（小松 2007a）。その際、かなりの紙幅を使

用しているにもかかわらず、滝口氏の「地域に寄付文化を胚胎させるための『あえてする』物語。とすれば本書は、学問や研究というよりは、むしろマーケティングや広告の言説により近い。」と指摘した点については一言も触れられなかったのも、肯定されたのだらうと筆者は読んだ。その後小松氏は次のように書かれたので、自覚的な宣伝であったことを再確認した次第である。

私は、公益や公益活動が実践（性）と極めて緊密な関係にある領域やテーマと考えている。実践には戦略的なこと、もっと正直に言えば政治的判断を全く回避することはできない。それに対応して、私は純粋に科学性や客観性の視点のみで、公益を研究・追究する姿勢はとってこなかった。公益大学のため、地域のために私なりに考えて、学問的な重要度や優先度とともに、取り上げやすい人物や成果をあげやすい人物などを優先して取り組むことも、あえてせざるを得ないと考えてきた。「公益の故郷」の提唱もそういういった視点と無縁ではない。（小松 2007b：92 頁）

学長とヒラの教員という立場の違いもあろうが、大学のため、地域のためには、学問と宣伝を区別して、「学」の前進を図るべきだというのが、筆者の見解である。「学」と名のるからには、大学内外の多種多様な人々からの批判に耐えられるよう努めなければならない。研究者の間では周知となっている山居倉庫と産業組合の対立の歴史や本間家の小作支配方法などを棚に上げて、宣伝まじりに庄内の地域史を語っても、地域外の研究者の間ではもちろんのこと、庄内地域に住む批判力を持つ人々の信頼は得られない。

また、大学という教育機関は一般的に社会全体への奉仕を要請されるが、それに加えて、小松氏と筆者が勤務する大学は、地域住民の税金によって設立された公設の大学である。一部の個人の出資による大学ではない。社会全体に対して、地域住民全体に対して、大学関係者がなすべきことは、専門性を活かして真理を追究し成果を示していくことではないだろうか。口当たりのよい宣伝文句とは異なる真理をなめれば、苦いと感じる人もいるだろう。それでも、それだけに一層、慎重にかつ毅然として研究を進めていく他はあるまい。宣伝は宣伝、学問は学問であり、混同して語ってはならない。

国家権力の意向に沿って研究テーマを選んだり結果を出したりすることが問題であることは今日では広く認識されているが、ことが「地域」となると、顔の見える関係であるだけにかえって問題認識が難しくなる。認識以前にお付き

合いが難しくなるかもしれない。それを承知の上で、筆者はあえて学問の立場に立ちたいと願っている。

（３）多忙な研究者に可能な仕事

限られた範囲の人物を取り上げてきた事情について小松氏は次のように語っている。

あれもこれもではなく、文献・資料的に、あるいは方法的に取り組みやすい人物、す
でにある程度知識・資料をもっていて、自分なりの評価や位置づけのできている人物か
らまとめざるをえない。それが、現在の力量を考えた私の正直な事情・状況である。

また立場上、戦略的にも、公益に関しては成果としてまとまったものから発信する必
要を考えてきたので、その点からも、まとめやすい人を優先するというのが、これまで
の私のやり方であり、限界であった（小松 2007b：90-91 頁）

宣伝を必要とする中でのやむを得ない著作であったと告白されたようで、たいへん哀しい。時間や体力が限られた研究者にできる仕事はたかが知れていることは十分に承知している。しかしながら幸いにも、庄内地域は前人未踏の地ではなく、すでに膨大な研究蓄積がある。一人の人物を追究するにせよ、一つの運動を追究するにせよ、先行研究を把握することから始めるのが、研究の王道ではないだろうか。庄内においては、文献リスト（書誌）の作成的作業が学問の進歩に役立つと筆者は判断し実践してきた。

庄内の人物中、すでに活字で紹介された人はいったい何人いるだろう。たとえば、地元紙『庄内日報』の連載「郷土の先人・先覚」（1988年4月～1989年3月、庄内日報社ホームページに掲載）だけで129名いる。須藤良弘『先人を識り、明日を学ぶ』では61名に加えて40名の略歴が掲載されている。余目町郷土史研究会『ものがたり余目町』の「余目にゆかりの人々」は100名を超える。それらは専門家ではない人にも十分に読めるよう書かれている。しかし、読んだ住民はどれくらいいるだろうか。存在すら知らない者が大多数だろう。文献紹介も研究者の社会的責任の一つだと筆者は考えている。

多忙な者が同じ時間を使うなら、書誌や文献紹介は、評伝執筆より仕事量が少なく、かつ、後に続く者に役立つ。無理をして大勢の人物についてまとめるよりも「学」の積み上げに貢献出来るのではないだろうか。

おわりに

以上、「公益」を語る時に使われる題材について「説得的要件」が不十分でないかということ、また不確かなのに確かであるかのように語られてきた問題について指摘した。

では、不確かな題材によらずして「公益学」を築いていくにはどうすればよいのだろうか。ここで、二つの研究法（アプローチ）を提案したい。

一つは語法、言葉の使用法についての追究である。「公益」と、それに類似した「公共」「公」は、どのような場面で、どのような意味で用いられてきたのか。市民感覚や法律の世界、各学問分野における語法を押さえておく必要があるだろう。家憲や碑文に「公益」の文字がある場合も、時代背景や状況の十分な検討が必要である。

もう一つは内実である。「公益」や「公共」という言葉の使用不使用にこだわらず、良き社会のあり方について追究していくことである。大学設立当時多くの人が「公益」という言葉に魅力を感じたのは、社会に散見される利己主義的行為への憤りと、まっとうに生きられる社会への希求によるものではなかっただろうか。原点に戻りたい。

「公益」という一つの名称から出発して新しい学問分野を創造していくというのは、何と魅力的で挑戦者を誘う行為だろう。こうした場に自分が置かれたことを感謝している。先行研究や資料を元に、一つ一つの題材について手堅く確定作業を進めていきたい。風通しのよい場での議論が活発化することと、再度鋭い指摘を受けることを、少し身構えながらも大いに期待している。大学内外や地域内外の批判に耐えるよう築いていく努力なしに新領域「公益学」の確立は覚束ない。

-
- 1 一々反論しない。再読いただければご理解いただけるだろう。一例を挙げれば、本間家などの資産家、支配層による活動が「それだけで公益性に反するということであれば」（小松 2007b : 99 頁）とあるが、第 12 号論文には、そのようなことは書いてない。
 - 2 河田著の「附録 農業倉庫業関係法令」による

- 3 山居倉庫側からの妨害については、山形：160-165 頁、420-421 頁が比較的詳しい。
- 4 三原作成。元となる数値は山形：155 頁と 158 頁。この統計を引用した三上：119 頁の表は、数値の写し間違いと思われる。
- 5 他に、菅野：11 頁など。
- 6 漢文の訳は佐藤：232 頁による。<http://www.mmt-tv.co.jp/bandesu/teiban/otonanotabi/030930.htm> J R 東日本仙台支社「大人の旅」2004.1.5 放送の「温故知新 大人の旅」で、本間家（本家）の本間万紀子氏が語っている。「腹八分目にしておきなさいよ！の意味だそうです」とコメント入り。
- 7 三原 2002、三原 2003。
- 8 佐藤道子の部屋（http://blog.goo.ne.jp/michico_1945/c/70ca3fc391cc10ab32859cb0420efc0a）より、2007 年 9 月 17 日にアップされた授業案。TOSS（登録商標第 4324345 号）、TOSS ランド（登録商標第 5027143 号）。

引用文献・参考文献

（著者名は五十音順。「：」の前の部分は本文中で示した文献略称）

- ・安倍：安倍季雄『本間光丘翁』贈正五位本間四郎三郎光丘頌徳会、1924 年
- ・余目町郷土史研究会『ものがたり余目町』上下巻、1996 年、1997 年
- ・石川正敏『庄内風土記 上巻』庄内日報、1972 年
- ・五十公野 1942：五十公野清一『大地主』國文社、1942 年
- ・五十公野 1943：五十公野清一『本間光丘 庄内平野の開発者』日本出版社、1943 年
- ・河田：河田嗣郎『農業倉庫』、弘文堂書房、1918 年
- ・菅野：菅野正「山形県庄内地方の農民と農本主義」『（科学研究費研究成果報告書）戦前期の山形県庄内地方における農本主義運動に関する実証的研究』（研究代表者：武田共治）所収、2002 年
- ・小松 2002：小松隆二『公益の時代』2002 年、24 頁
- ・小松 2003：小松隆二『公益とまちづくり文化』2003 年、160 頁
- ・小松 2007a：「クロマツ林や農業倉庫… 評価できる庄内の公益性」『山形新

聞』2007年11月12日付夕刊

- ・小松 2007b：小松隆二「庄内地域と公益に関するメモー三原容子さんの批判にこたえる」『東北公益文科大学総合研究論集』第13号、2007年
- ・小山：小山孫二郎「大地主と庄内米の流通——山居倉庫の顛末——」、農業発達史調査会『日本農業発達史 別巻上』（中央公論社、1958）720-788頁所収。
- ・財団：財団法人公益法人協会『市民チャリティ委員会報告書 市民にとっての公益とは？』2007年（インターネットでもダウンロードが可能である）。
- ・齋藤：齋藤美澄『贈正五位本間四郎三郎光丘翁事歴』山形県飽海郡私立学会、1920年
- ・佐藤：佐藤三郎『酒田の本間家』中央企画社、1972年
- ・荘内日報社『荘内日報』連載「郷土の先人・先覚」（1988年4月～1989年3月、荘内日報社ホームページに掲載）
- ・庄内経済農業協同組合連合会『庄内経済連25年のあゆみ』山形県庄内経済農業協同組合連合会、1974年
- ・須藤良弘『先人を識り、明日を学ぶ 酒田・飽海地方の学ぶべき先達たち』酒田法人会青年部、2006年
- ・高橋：高橋義順『山居倉庫と庄内米』（庄内倉庫株式会社、1997年）（同著者の『山居倉庫の創業と転換』社団法人丕顕会、1989年発行後、さらに資料を収集しまとめたもの）
- ・立石友男「藩制時代における庄内砂丘の砂防植栽（Ⅲ）—酒田本間家の事例的研究—」日本大学文理学部自然科学研究所『研究紀要』14（1979年）45-58頁所収
- ・東北公益大：東北公益文科大学『平成14年度 山形の文化』（公益信託「荘内銀行ふるさと創造基金」助成事業報告書）
- ・滝口克典「味読 郷土の本『公益の種を蒔く人びと』」『山形新聞』2007年10月20日付夕刊
- ・長井：長井政太郎『坂野辺新田の発達』発行者は坂野辺新田佐藤良藏、1955年
- ・堀川：堀川豊永『救荒の父 本間光丘翁』人文閣、1944年
- ・真壁：真壁仁『野の自叙伝』民衆社、1984年

- 三上：三上初子『ふるさとの歴史 庄内藩の米札から山居倉庫への移り変わり』私家版か、1985年
- 三原 2002:三原容子「よみがえる「公益」の碑—「公益」の碑発見(?)物語—」『現代と公益』第二号、2002年(「よみがえる「公益」の碑」は小松氏が名づけ親である)
- 三原 2003：三原容子「「公益」の碑後日談」『現代と公益』第五号、2003年
- 三原 2007：三原容子「公益考(二) —庄内地域史の取扱いについて—」『東北公益文科大学総合研究論集』第12号、2007年
- 楞野：楞野亦寿『生きた国史 尋常五六学年用』受験研究社、1936年
- 山形:山形県農業協同組合沿革史編纂委員会編『山形県農業協同組合沿革史』山形県農業協同組合法十周年記念事業実行委員会、1960年